



第 3 図 陸上移動局通話テスト (数字は感度明瞭度を示す)

動作し、常時は 2.6m のホイップアンテナを使用している。整合はアンテナ基部に設けられたブラケット内の整合部を外より簡単に調整すれば良い。また別に 35m の仮設空中線を用いることもできるようになっている。その有効距離は 30~40km であるが、第 3 図に示すように京大の男鹿半島門前における発音弾テストの通信連絡に協力した時の通話テ

ストの結果は、門前一部間との感度、明瞭度共に 5 でホイップアンテナで十分その目的を達した。また本部から門前に至るまでの通話状況は、秋田市内とのテストは雑音と感度の低下でしばしば不能となり、市外に出ると感度明瞭度は漸時上昇し 2~5 となった。この実験の結果ホイップアンテナでは地形の状況、障害物の有無が非常に影響することがわかった。

5. 結言

今回の実験で特記すべき点は、ジープに無線局を設置した結果、ジープの活用が能率化されたこと、観測各班への人員器材の輸送、連絡が早くなったこと、テレメータレーダ班のトランスポンダの電波伝播テスト、京大の発音弾テストのように移動させての実験の通信連絡が可能なことであり、今後も上述のような点でその偉力をますます發揮するものと信ずる。終りにこの飛しょう実験ごとに協力をいただいた秋田海上保安部、同通信所、各巡視船通信室、ヘリコプタ通信室の方々、ならびに無線局の免許に関して便宜を計って下さった電波庁、関東電波監理局、ジープ用 3W 無線機の製作をしていただいた沖電気 KK、無線局免許手續にご協力された当所業務掛に厚く感謝する。 (1957. 9. 10)

次号予告 (12月号)

研究解説

テルライトガラスについて.....	今岡 稔 佐竹 一謙
自動車に関する研究問題.....	平尾 収
吊橋の減衰係数の実測結果.....	岡本 舜三 久保慶三郎
連続電量滴定法による水中の塩素 または亜硫酸の定量.....	高橋 武雄 桜井 裕

研究速報

バレル仕上 (その 3).....	松永 正久 萩生田善明
ラジアルガスタービンの研究-第 7 報- 放射状直線羽根と彎曲羽根の比較-	水町 長生

総索引 (第 9 卷 1957 年度)

表紙写真

カッパⅢ型 3 号機の飛しょう航跡を示す。下方太線がブースタの航跡。上方細線がメインロケットの航跡である。メイン・ロケット燃焼終了直前から大きく揺れていることが確認された。

観測地点：ランチャー方向から北へ約 103°, 500m
使用カメラ：P-20 航空用 Ziss 製、レンズ：焦点距離 200mm Topogon, f: 5.6 画面寸法 30cm × 30cm, フィルム：Kodak Super XX, Aerographic film.

正誤表 (10月号)

頁	段	行	種別	正	誤
11	右	下3	本文	端子	極子
22			第 7 図	5	(縦軸上の目盛)-5
"	"	"	(11)式	$ P = \frac{\pi R^2}{a \Delta} \left \frac{2J_1\left(\frac{kRx}{a}\right)}{\frac{kRx}{a}} \right $	$ P = \frac{\pi R^2}{a \Delta} \frac{2J_1\left(\frac{kRx}{a}\right)}{\frac{kRx}{v}}$